

令和 5 年 2 月 24 日

教 育 長 様

研究コース	
A グループ研究 A	
校 園 コード (代表者校園の市費コード)	
681512	
選定番号	127

代表者 校 園 名 :	大阪市立大宮小学校
校 園 長 名 :	丹羽 和江
電 話 :	6953-4001
事務職員名 :	根津 岳
申請者 校 園 名 :	大阪市立大宮小学校
職 名 ・ 名 前 :	主務教諭 菱垣 裕子
電 話 :	6953-4001

令和 4 年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和 4 年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究 A	研究年数	新規研究 (1 年目)
2	研究テーマ	自分の考えを筋道立てて表現し、課題解決する子どもを育てる ～生きて働く算数科の日常化をめざして～			
3	研究目的	算数化における基礎的・基本的な知識や技能を活用して課題解決するために必要な数学的な思考力、判断力、表現力を育む。算数を主体的に生活や学習に生かそうとする力を育成するための指導内容や方法を明らかにする。			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。(MSゴシック 9.5 点 イント)</p> <p>「課題解決をするために必要な数学的思考力・判断力・表現力を育む」効果的な指導法の工夫 先行研究・実践を収集し、教員間で実践を交流して指導法の見直し工夫を図る。</p> <p>①昨年度の学力経年調査や運営に関する計画をもとに、本校児童の学力等を再度分析して課題を明らかにし、児童に付けたい力を共有した。また、先行研究・実践例を参考にしながら、授業実践のあり方、研究体制等について共通理解した。 ・研究推進委員・研究部会 (4/13) ・校内全体研究会 (4/21)</p> <p>②研究授業・公開授業、研修会を通して授業改善点を整理した。(算数科のみ記載) ・6年(5/30)・4年(6/30)・2年(9/26・27)・3年(10/18・19・24)・1年(11/15・22)・5年(1/24・30) ・校内研究・研修会 (5/25、6/23、9/16、10/6、10/26、1/11)</p> <p>③主体的な学習に児童を導くための「出あう」段階の工夫 児童が課題解決したいと思うような問題提示の仕掛けについて、指導案検討会や討議会で話し合いを行った。ICTや具体物の活用、指導者の提示するタイミングや設定などの工夫・改善が見られ、共有することができた。</p> <p>④筋道立てて考え表現するための工夫 児童が筋道立てて考えるとは、どのようなことであるかを全教員で共通理解し、めざす子ども像とした。昨年度までの国語科の研究を生かし、図表を言葉で表すことや抽象的なことを具体的に話す力を、自分の立てた式や考えを発表する際に用いることを狙った。話し合いの場面では、全員が参加できるよう全体交流の前に各自が自分の考えをもつことができていることを大前提とし、そのための手立てをヒントカードや壁面掲示での既習事項の確認とした。ヒントカードは、児童の思考の流れを考慮して作成し、壁面掲示もただ掲示するのではなく、色分けや文字の大きさを変えるなど思考の一助となるよう工夫した。</p>			

5	研究発表等の の日程・ 場所・ 参加者数	研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。					
		日程	令和 4 年 10 月 24 日			参加者数	約 38 名
		場所	大阪市立大宮小学校				
		備考					
6	成果・課題	大阪市教育振興基本計画に示されている、 <u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u> および <u>教員の資質や指導力の向上</u> について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。					
		【見込まれる成果1】 ○児童の学力向上 ・算数科学習指導や取組の工夫、授業改善を行うことで、児童の論理的思考、情報活用・発信力（表現力）が向上する。					
		《検証方法》 児童のアンケート調査で「算数科の学習は楽しい」「よくわかる」「課題を解決したり、課題解決のプロセスで考えたことをまとめたり発表したりするのは楽しい」と答える割合を年度当初より5%増やす。					
		〔検証結果と考察〕 児童アンケートによると、年度当初「算数科の学習は楽しい」「よくわかる」「課題を解決のプロセスで考えたことをまとめたり発表したりするのは楽しい」と答える割合は、そう思う41%、だいたいと思う29%からそう思う39%、だいたいと思う36%という結果であった。そう思うと答えた割合は減少したが、だいたい思うと回答した割合も含めると、肯定的な回答の割合が増えた。学習課題をより児童の日常に近づけたものとなるように工夫した結果と考える。					
		【見込まれる成果2】 ○指導力の向上 本年度の全国学力・学習状況調査や昨年度の大阪市学力経年調査問題を分析し、いま求められている力を全教員で共有することで、授業改善ができ、教員の指導力が向上する。					

《検証方法》	
教員のアンケート調査で、「算数科の指導のポイントが分かり、主体的・対話的で深い学びのある授業ができつつある」の項目で、肯定的な回答を年度当初より5%増やす。	
〔検証結果と考察〕	
教員のアンケート結果は、肯定的な回答が年度当初よりも5%増加した。本年度の全国学力・学習状況調査や昨年度の大阪市学力経年調査の算数科の問題分析とともに、研究教科が国語科から算数科へと変わったことで、これまでの研究をどのように生かすのかを探りながら実践した。その結果、教員一人一人が児童が主体的に問題に取り組み、解決していこうとするためには、どのような課題設定が良いのかという指導のポイントを研究し、それを討議等で深めることができた。また、「言葉・図・式」という算数科における思考の表現において、それぞれ一つの表現に留まるのではなく、言葉で表したものを図で表す、図を言葉で説明するなど、互いに行き来することで、考えを練り上げ、それが算数科の思考力・表現力を高めることにつながると学んだ。	
【見込まれる成果3】	
○校内研究の活性化	
教材研究、指導法の工夫、指導案作り、研究授業・研究協議会等の過程で、本校教員の指導力向上が図られるとともに、協業体制が強くなる。	
《検証方法》	
教員へのアンケート調査で「算数科の研究で、授業改善の方法がわかり、自信が付いた」と答える教員の割合を、年度当初より高くする。	
〔検証結果と考察〕	
教員へのアンケート調査の結果は5 %増加であった。 算数科の学習において、児童の発達段階を考慮した教材研究や筋道立てて表現する力を高めるための発問や指示の工夫を研究し、実践することができた。指導案検討会では、よりよい研究となるために筋道立てて表現するとはどのような力のことであるかを探求し、指導法について活発な意見交流を行った。授業実践を行い、児童にとって学習したことが日常に生かせるものであったかを検証し、指導講評をいただくことで、よりよい授業づくりについて学び、次へとつながることができた。	

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果 4】 ○保護者・地域の意識改革 教職員の取組や児童の成長から、学校への信頼が高まる。</p> <p>《検証方法》 保護者アンケートで「学校は分かる授業に努めている」「学校は子どもの力を高める努力をしている」の項目で、肯定的に答える割合を年度当初より増加させる。</p> <p>〔検証結果と考察〕 保護者アンケートの結果によると、「学校は分かる授業に努めている」の項目で、そう思う49%、だいたいそう思う49%からそう思う46%、だいたいそう思う52%、「学校は子どもの力を高める努力をしている」の項目で、そう思う54%、だいたいそう思う44%からそう思う49%、だいたいそう思う50%であった。「そう思う」数値は減少したが、肯定的な答えの割合は増加した。テストの結果・点数だけで判断する保護者も多い。どんな力をつけさせようとしているか、どこまでできているかの、具体的により分かりやすい情報発信が、足りなかったと思われる。</p> <p>【見込まれる成果 5】</p> <p>《検証方法》</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>【研究全体を通じた成果と課題】 具体的に記載してください。 児童の教科の学習と日常生活の乖離が見られるという実態から課題解決・追究のエネルギーを大きくすることをめざした研究であったが、学習過程の「出会う」段階において、 1年（残っている数を知りたい） 2年（どちらのジュースが多いか知りたい） 3年（くじを何回引けるか知りたい） 4年（数値をグラフにして新聞に載せたい） 5年（どちらが安い知りたい） 6年（テーマパークの広さを比べたい）と、課題設定し、具体物やICTを活用した提示を工夫することで、解決しようという意欲を高めることができた。また、筋道立てて表現する力を高めるために、タブレットやホワイトボードを用いて、自立解決から協働的な学びの場の工夫を図った。しかし、児童が各自の意見を発表した後の全体交流で、指導者がまとめる場面が多く、協働して考えを練り上げ課題解決の方法を児童がまとめる段階へはなかなか進めなかった。課題解決のため、児童につけたい力とその指導法のさらなる研究が課題である。</p> <p>《代表校園長の総評》 国語科から算数科に研究教科は変わったが、児童が課題を見つけ、論理的に考え、追求し、分かったことを筋道立てて自分の言葉でまとめ、発表するというプロセスはそう大きくは変わらないと考えている。 本年度の研究で、日常と結びついた問題から課題を見つけ、追究していくなかで、「算数が生活に役立つ」ことを実感した児童は多くなった。自主学習の中身も、単なる計算問題から、考えて説明する問題にチャレンジする子も増えたと担任からの報告があった。それを喜ぶ教員が、他の教員に伝えていく姿も見られた。少しずつの学びであるが、今回の研究で、若手教員をはじめ、全教員で共有でき、一歩前進できた。 今後も体験学習を多く取り入れながら、教科を横断して、自分で考え、説明できる力、学んだことを生かして生活をより良いものに改善していこうとする力をつけさせたいと考える。</p>
---	-------	---